



自著紹介

『日本における メディア・オリンピックの誕生： ロサンゼルス・ベルリン・東京』

(ミネルヴァ書房、2016年2月)

浜田幸絵

(島根大学法文学部言語文化学科准教授)

人や情報の地球規模での移動が活発となっている現在では、オリンピックを特別なイベントであると考える人は少なくなっている。しかし数十年前まで、オリンピックは人々が外の世界に触れる極めて貴重な機会であった。1964年東京オリンピックでは、日本にかつてないほど多くの外国人がやってきて、その国際的な雰囲気には酔いしれた。また、4年に1度開催されるオリンピックは、自国で開催されなくてもメディアで大きく報道される。オリンピックの報道は、大勢の人々に、自分では行ったことのない国々とそこに生きる人々についてのイメージを提供してきた。

本書は、メディアとオリンピックとが結びつく歴史的過程に着目し、特に1930年代の日本において、メディアによって伝えられたオリンピックがいかなる社会的・文化的意

味をもち、国民意識の形成とどのように関わっていたのか、を明らかにしたものである。オリンピックは、メディアが報じることによってはじめて人々に認識されていく。メディアがなければ人々は、自分が今いる地点から遠く離れた場所で開催されているオリンピックのことなど、知ることはできない。オリンピックはメディアの技術革新の機会にもなってきた。このように考えると、メディアとオリンピックとの関係は様々な観点から検討していくことができるが、本書で焦点を当てているのは、日本においてマス・メディアのイベントとしてのオリンピックが成立していく時期、具体的には1932年ロサンゼルス・オリンピック、1936年ベルリン・オリンピック、1940年東京オリンピック（1938年7月に返上）である。

本書は、2部構成になっている。

第1部では、メディア（新聞社や放送局）を中心としながらも国家や企業も含めた諸組織が、オリンピックにどのように関与していたのか、1940年東京オリンピックの計画がどのように展開していたのかについて、明らかにしている。初期のオリンピック報道は現在の感覚からすると、非常に少なく、内容も競技結果を淡々と伝えるだけでドラマチックな要素は欠けていた。写真も少なく、ラジオ放送もまだない。オリンピックがメディアの大規模報道の対象となり、広範に国民を巻き込むようになるのは、1930年代のことである。

第2部では、1930年代のオリンピック報道の内容（メディアがオリンピックをどのように描き出したのか）を分析している。1932年のロサンゼルス大会の報道では、日本人と外国人を対立的に捉える図式がみられ、戦争のメタファーが用いられるなどした。単純化していうと、この時期にナショナリズムを高揚させるような表現が目立つようになったということになるが、本書では、日本人の特徴（優位性）を際立たせるために「外国人」が用いられている点を指摘するなど、ナショナリズムの表現のあり方を詳細に分析している。東京の新聞、地方の新聞、大衆雑誌、女性雑誌、総合雑誌など、複

数のメディアを横断的に取り上げ、オリンピック報道のなかでの地元への帰属意識と国家への帰属意識との関係、女性や家族の描かれ方、知識人による批判的意見の表明、広告の果たした役割などについても論じている。

「戦前日本のオリンピック」ときくと、国威発揚に利用された暗いオリンピックを思い浮かべる方もいるかもしれないが、本書で明らかにしているように、1930年代のオリンピックは、ナショナリズムと強く結びつくとともに、人々に国際社会を体験する機会を提供し、消費社会のなかの娯楽としても受容された。この頃、世界の異なる場所が、一つのイベントによって互いに連結しはじめていたのであり、それは、多くの人々が心を躍らせるようなものであったといってよい。ここに、現代のオリンピックの原型があったといえる。

筆者が学生時代を過ごした2000年代は、ごく普通の人々が関わっているポピュラー文化を対象とした研究が盛んとなった時期であった。スポーツやオリンピック、メディアの文化は、世俗的なもので、ありふれているため、それを真面目に研究したところで何がわかるのかと思われるがちである。ただ、例えばメディア

のイベントとしてのオリンピックをみると、そこには、様々な権力関係のせめぎあいがあり、それを通して私たちの見ている世界（「現実」）がどのように構成されているのかを批判的に問い直すことが可能となる。本書は博士論文を改稿した学術書で

あるため一般的な書籍としては読みにくいと思うが、少しでも多くの方に、オリンピック、大きくいうと現代のメディアや文化を読み解くことの面白さを感じていただけると嬉しい。

